

2023年12月15日に日本野球規則委員会より、2024年度の野球規則改正が発表されました。

日本の野球規則は、アメリカの『Official Baseball Rules』の改正を受けて、「原文に忠実に」をモットーに通常1年遅れで改正されます。ただし、MLBで採用されているベースの拡大や極端な守備シフトの禁止については、【注】をつけて採用を見送ることとしています。

発表された内容は以下のとおりで、赤く表示した部分が改正された内容です。

現 行	改 正 後
<p>2.01 競技場の設定 第5段落まで(省略) 本塁からバックストップまでの距離、塁線からファウルグラウンドにあるフェンス、スタンドまたはプレイの妨げになる施設までの距離は、60 呎 (18.288 ㍎) 以上を必要とする。 以下最終段落前まで(省略) 巻頭1図のグラスライン(芝生の線)および芝生の広さは、多くの競技場が用いている規格を示したものであるが、その規格は必ずしも強制されるものではなく、各クラブは任意に芝生および芝生のない地面の広さや形を定めることができる。</p> <p>【付記】(a)1958年6月1日以降プロフェッショナル野球のクラブが建造する競技場は、本塁より左右両翼のフェンス、スタンドまたは左右両翼のフェアグラウンド上にあるプレイの妨げになる施設までの最短距離は325 呎 (99.058 ㍎)、中堅のフェンスまでの最短距離は400 呎 (121.918 ㍎)を必要とする。 (b)1958年6月1日以降現在の競技場を改造するにあたっては、本塁より左右両翼およびフェンスまでの距離を、前記の最短距離以下に短縮することはできない。</p> <p>【軟式注】学童部では、投手板と本塁間および各塁間の距離を次のとおりとする。塁間の距離は23 ㍎。投手板と本塁との距離は16 ㍎。</p>	<p>2.01 競技場の設定 第5段落まで(省略。変更なし) 本塁からバックストップまでの距離、塁線からファウルグラウンドにあるフェンス、スタンドまたはプレイの妨げになる施設までの距離は、60 呎 (18.288 ㍎) 以上を<b>推奨する</b>。 以下最終段落前まで(省略。変更なし) 巻頭1図のグラスライン(芝生の線)および芝生の広さは、多くの競技場が用いている規格を示したものであるが、その規格は必ずしも強制されるものではなく、各クラブは任意に芝生および芝生のない地面の広さや形を定めることができる。<b>ただし、内野の境目となるグラスラインは、投手板の中心から半径95 フィート(28.955 メートル)の距離とし、前後各1 フィートについては許容される。しかし、投手板の中心から94 フィート(28.651 メートル)未満や96 フィート(29.26 メートル)を超える箇所があってはならない。</b></p> <p>【注】我が国では、内野の境目となるグラスラインまでの距離については、適用しない。</p> <p><del>【付記】</del> <del>削除</del></p> <p>【軟式注】学童部では、投手板と本塁間および各塁間の距離を次のとおりとする。塁間の距離は23 ㍎。投手板と本塁との距離は16 ㍎。</p>

### 2.03 塁

一塁、二塁、三塁は、白色のキャンバスまたはゴムで被覆されたバッグで表示し、巻頭 2 図に示すように地面に正しく固定する。

一塁と三塁のバッグは、完全に内野の内に入るように設置し、二塁のバッグは、図表の二塁の地点にその中心が来るように設置する。

キャンバスバッグはその中に柔らかい材料を詰めて作り、その大きさは 15 呎 (38.1 呎) 平方、厚さは 3 呎 (7.6 呎) ないし 5 呎 (12.7 呎) である。

### 2.05 ベンチ

ホームクラブは、各ベースラインから最短 25 呎 (7.62 呎) 離れた場所に、ホームチーム用およびビジティングチーム用として、各 1 個のプレーヤースベンチを設け、これは左右後方の三方に囲いをめぐらし、屋根を設けることが必要である。

### 3.02 バット

(a) バットはなめらかな円い棒であり、太さはその最も太い部分の直径が 2.61 呎 (6.6 呎) 以下、長さは 42 呎 (106.7 呎) 以下であることが必要である。バットは 1 本の木材で作られるべきである。

【付記】接合バットまたは試作中のバットは、製造業者がその製造の意図と方法とについて、規則委員会の承認を得るまで、プロフェッショナル野球 (公式試合および非公式試合) では使用できない。

【注 1】我が国のプロ野球では、金属製バット、木片の接合バット及び竹の接合バットは、コミッショナーの許可があるまで使用できない。

【注 2】アマチュア野球では、各連盟が公認すれば、金属製バット、木片の接合バット及び竹の接合バットの使用を認める。ただし、接合バットについては、バット内部を加工したものは認めない。(6.03 a 5 参照)

【注 3】アマチュア野球では、金属製バットを次のとおり規定する。

①最大径の制限--バットの最大直径は、67 ミリ未満とする。

②質量の制限--バットの質量は、900 グラム以上とする。なお、金属製バットの質量とは完成品であり、ヘッドキャップ (一体成形等により、ヘッドキャップを用いていないものにあつては、それと同等の部位)、グリッペンブ、グリップテープを除いた本体の質量は、810 グラム ± 10 グラム以

### 2.03 塁

一塁、二塁、三塁は、白色のキャンバスまたはゴムで被覆されたバッグで表示し、巻頭 2 図に示すように地面に正しく固定する。

一塁と三塁のバッグは、完全に内野の内に入るように設置し、二塁のバッグは、図表の二塁の地点にその中心が来るように設置する。

キャンバスバッグはその中に柔らかい材料を詰めて作り、その大きさは 18 呎 (45.7 呎) 平方、厚さは 3 呎 (7.6 呎) ないし 5 呎 (12.7 呎) である。

【注】我が国では、一塁、二塁、三塁のキャンバスバッグの大きさは 15 呎 (38.1 呎) 平方とする。

### 2.05 ベンチ

ホームクラブは、削除 ホームチーム用およびビジティングチーム用として、各 1 個のプレーヤースベンチを設け、これは左右後方の三方に囲いをめぐらし、屋根を設けることが必要である。

### 3.02 バット

(a) バットはなめらかな円い棒であり、太さはその最も太い部分の直径が 2.61 呎 (6.6 呎) 以下、長さは 42 呎 (106.7 呎) 以下であることが必要である。バットは 1 本の木材で作られるべきである。

【付記】接合バットまたは試作中のバットは、製造業者がその製造の意図と方法とについて、規則委員会の承認を得るまで、プロフェッショナル野球 (公式試合および非公式試合) では使用できない。

【注 1】我が国のプロ野球では、金属製バット、木片の接合バット及び竹の接合バットは、コミッショナーの許可があるまで使用できない。

【注 2】アマチュア野球では、各連盟が公認すれば、金属製バット、木片の接合バット及び竹の接合バットの使用を認める。ただし、接合バットについては、バット内部を加工したものは認めない。(6.03 a 5 参照)

【注 3】 削除

上とする。

③形状の制限—金属製バットの形状は、先端からグリップ部までは、なだらかな傾斜でなければならない。

なお、なだらかな傾斜とは、打球部からグリップ部までの外径の収縮率(全体傾斜率)が、10%を超えないことをいう。

また、テーパー部の任意の個所においても、50<sup>mm</sup>の間での外径収縮率(最大傾斜率)は、20%を超えないことをいう。

【軟式注】軟式野球では、この規定を適用しない。

#### 5.02 守備位置

(c) 投手と捕手を除く各野手は、フェア地域ならば、どこに位置してもさしつかえない。

【注】投手が打者に投球する前に、捕手以外の野手がファウル地域に位置を占めることは、本条で禁止されているが、これに違反した場合のペナルティはない。

審判員がこのような事態を発見した場合には、速やかに警告してフェア地域に戻させた上、競技を続行しなければならないが、もし、警告の余裕がなく、そのままプレイが行なわれた場合でも、この反則行為があったからといってすべての行為を無効としないで、その反則行為によって守備側が利益を得たと認められたときだけ、そのプレイは無効とする。

【軟式注】 削除

#### 5.02 守備位置

(c) 投手と捕手を除く各野手は、フェア地域ならば、どこに位置してもさしつかえない。

【注1】投手が打者に投球する前に、捕手以外の野手がファウル地域に位置を占めることは、本条で禁止されているが、これに違反した場合のペナルティはない。

審判員がこのような事態を発見した場合には、速やかに警告してフェア地域に戻させた上、競技を続行しなければならないが、もし、警告の余裕がなく、そのままプレイが行なわれた場合でも、この反則行為があったからといってすべての行為を無効としないで、その反則行為によって守備側が利益を得たと認められたときだけ、そのプレイは無効とする。

内野手の守備位置については、次のとおり規定する。

- i. 投手が投手板に触れて、打者への投球動作および投球に関連する動作を開始するとき、4人の内野手は、内野の境目より前に、両足を完全に置いていなければならない。
- ii. 投手が打者に対して投球するとき、4人の内野手のうち、2人ずつは二塁ベースの両側に分かれて、両足を位置した側に置いていなければならない。
- iii. 二塁ベースの両側に分かれた2人の内野手は、投手がそのイングの先頭打者に初球を投じるときから、そのイングが完了するまで、他方の側の位置に入れ替わったり、移動したりできない。  
ただし、守備側のプレーヤーが交代したとき(投手のみの交代は除く)は、いずれの内野手も他方の側の位置に入れ替わったり、移動してもかまわない。

イングの途中で内野手として正規に出場したプレーヤーは、その交代後に投手が打者に投じるときから、そのイングが完了するまで、他

#### 5.10 プレーヤーの交代

(k) 両チームのプレーヤーおよび控えのプレーヤーは、実際に競技にたずさわっているか、競技に出る準備をしているか、あるいは一塁または三塁のベースコーチに出ている場合を除いて、そのチームのベンチに入っていないなければならない。

試合中は、プレーヤー、控えのプレーヤー、監督、コーチ、トレーナー、バットボーイのほかは、いかなる人もベンチに入ることは許されない。

**ペナルティ** 本項に違反したときは、審判員は、警告を発した後、その反則者を競技場から除くことができる。

【注1】 次打者席には、次打者またはその代打者以外は入ってはならない。

【注2】 ベンチあるいはダッグアウトに入ることのできる者に関しては、プロ野球では各リーグの規約によって定め、アマチュア野球では協会、連盟ならびに大会などの規約に基づいて定めている。

方の側の位置に入れ替わったり、移動したりできない(そのイニングで、その後再び別の交代があった場合は除く)。

【原注】 審判員は、内野手の守備位置に関する本項の目的として、投手が投球する前に打者がどこへ打つのかを予測して、二塁ベースのどちらかの側に3人以上の内野手が位置するのを防ぐことであることに留意しなければならない。いずれかの野手が本項を出し抜こうとしたと審判員が判断した場合、次のペナルティが適用される。

**ペナルティ** 守備側チームが本項に違反した場合、投手の投球にはボールが宣告され、ボールデッドとなる。

ただし、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、規則違反とは関係なく、プレイは続けられる。もし、本項に違反した後に、他のプレイ(たとえば、犠牲フライ、犠牲バントなど)があった場合は、攻撃側の監督は、そのプレイが終わってからただちに、違反行為に対するペナルティの代わりに、そのプレイを生かす旨を球審に通告することができる。

【注2】 我が国では、本項後段の内野手の守備位置については、適用しない。

#### 5.10 プレーヤーの交代

(k) 両チームのプレーヤーおよび控えのプレーヤーは、実際に競技にたずさわっているか、競技に出る準備をしているか、あるいは一塁または三塁のベースコーチに出ている場合を除いて、そのチームのベンチに入っていないなければならない。

プレーヤー、監督、コーチ、トレーナーおよび試合中にベンチやブルペンに入ることを許されたクラブ関係者は、実際に競技にたずさわっているか、競技に出る準備をしているか、その他許される理由以外で、競技場に出ることはできない。

**ペナルティ** 本項に違反したときは、審判員は、警告を発した後、その反則者を競技場から除くことができる。

【注1】 次打者席には、次打者またはその代打者以外は入ってはならない。

【注2】 ベンチあるいはダッグアウトに入ることのできる者に関しては、プロ野球では各リーグの規約によって定め、アマチュア野球では協会、連盟ならびに大会などの規約に基づいて定めている。

#### 7.01 正式試合

(b) 両チームが9回の攻撃を完了してなお得点が等しいときは、さらに回数を重ねていき、

- (1) 延長回の表裏を終わって、ビジティングチームの得点がホームチームの得点より多い場合
- (2) ホームチームが延長回の裏の攻撃中に決勝点を記録した場合に試合は終了する。

#### 7.01 正式試合

(b) **延長回**

(1) 両チームが9回の攻撃を完了してなお得点が等しいときは、さらに回数を重ねていき、

- (A) 延長回の表裏を終わって、ビジティングチームの得点がホームチームの得点より多い場合
- (B) ホームチームが延長回の裏の攻撃中に決勝点を記録した場合に試合は終了する。

(2) 9回が完了した後、10回以降は、走者二塁から、次のとおり始めることとする。

(A) 10回以降の延長回の先頭打者(またはその打者の代打者)は、前の回からの継続打順とする。

(B) 延長回における二塁走者は、その回の先頭打者の前の打順のプレーヤー(またはそのプレーヤーの代走者)とする。

たとえば、10回の先頭打者が5番打者であれば、4番打者(またはその代走者)が二塁走者となる。ただし、先頭打者の前の打順のプレーヤーが投手であれば、その投手の前の打順のプレーヤーが代わりに二塁走者を務めることができる。

交代して退いた打者および走者は、規則 5.10により、再び試合に出場することはできない。

(C) 投手の自責点を規則 9.16により決定するために、延長回を開始するときの二塁走者は守備の失策により二塁に到達したようにみなされるが、チームまたはプレーヤーに失策は記録されない。公式記録員は、延長回における打者および二塁走者についても、規則 9.02により記録をする。

(D) 延長回が始まるたびに、球審は二塁走者が適正であるかを確認するため、攻撃側チームの打順表を確認する。もし、その走者が適正でなければ、球審はただちに攻撃側チームの監督に知らせて、適正な二塁走者にさせる必要がある。また、プレイが開始された後に、審判員またはいずれかの監督が、走者が適正でないことに気付けば、その走者は適正な走者と入れ替わらなければならない、打順の誤りに起因したことにより、プレイを無効としない限りは、すべてのプレイは正規なものとなる。得点する前後に関係なく、適正でない走者に対するペナルティはない。

**【注】** 我が国では、所属する団体の規定に従う。

<p>8.04 審判員の報告義務</p> <p>(a) 審判員は、すべての規則違反またはその他の報告しなければならない出来事を、試合終了後 12 時間以内にリーグ会長まで報告する義務がある。ただし、監督またはプレーヤーを退場させた試合には、その理由を付記することを必要とする。</p> <p>(b) 審判員がトレーナー、監督、コーチまたはプレーヤーを次の理由で退場させた場合には、審判員はその詳細を 4 時間以内にリーグ会長に報告する義務がある。</p> <p>すなわち、これらの人々が、審判員、トレーナー、監督、コーチまたはプレーヤーに、野卑不作法な言を用いて黙過できない侮辱を加えたためか、暴力を働いたことが退場理由となった場合がそれである。</p> <p>(c) リーグ会長は、審判員から、監督、コーチ、トレーナー、プレーヤーを退場させた旨の報告を受けたならば、ただちに自己の判断で適当と思われる制裁を科し、その旨を当事者ならびにその所属クラブの代表者に通告しなければならない。</p> <p>制裁金を科せられた当事者が、通告後 5 日以内に、リーグ事務局長にその総額を支払わなかった場合には、支払いが完了するまで、試合に出場することもベンチに座ることも禁止される。</p>	<p>8.04 審判員の報告義務</p> <p>(a) 審判員は、すべての規則違反またはその他の報告しなければならない出来事を、試合終了後 <u>削除</u> にリーグ会長まで報告する義務がある。ただし、監督またはプレーヤーを退場させた試合には、その理由を付記することを必要とする。</p> <p>(b) 審判員がトレーナー、監督、コーチまたはプレーヤーを次の理由で退場させた場合には、審判員はその詳細を <u>削除</u> リーグ会長に報告する義務がある。</p> <p>すなわち、これらの人々が、審判員、トレーナー、監督、コーチまたはプレーヤーに、野卑不作法な言を用いて黙過できない侮辱を加えたためか、暴力を働いたことが退場理由となった場合がそれである。</p> <p>(c) リーグ会長は、審判員から、監督、コーチ、トレーナー、プレーヤーを退場させた旨の報告を受けたならば、ただちに自己の判断で適当と思われる制裁を科し、その旨を当事者ならびにその所属クラブ <u>削除</u> に通告しなければならない。</p> <p>制裁金を科せられた当事者が、 <u>削除</u> リーグ事務局長にその総額を支払わなかった場合には、支払いが完了するまで、試合に出場することもベンチに座ることも禁止される。</p>
<p>用語の定義</p> <p>46 LEAGUE PRESIDENT 「リーグプレジデント」(リーグ会長)——リーグ会長は本規則の施行の責任者であり、本規則に違反したプレーヤー、コーチ、監督または審判員に制裁金または出場停止を科したり、規則に関連する論争を解決する。</p> <p>【原注】 メジャーリーグでは、本規則のリーグ会長の職務はコミッショナーの指名した者によって遂行される。</p> <p>【注】 我が国のプロ野球では、本規則のリーグ会長の職務はコミッショナーの指名した者によって遂行される。</p>	<p>用語の定義</p> <p><u>46</u> <u>削除</u></p> <p>以下、番号繰り上げ</p>

以上